

令和2年度・令和3年度・令和4年度 教育事業

ココロとカラダに eキャンプ 報告書



ココロにe・カラダにeプログラムでココロもカラダも元気に！

ごあいさつ

文部科学省が実施する基幹統計の1つである「学校保健統計調査」の2021年度の結果によると、全国的な傾向としては近視や内斜視の増加など、子どもの目の健康への懸念が年々高まっている。

宮城県内に焦点を絞ると、肥満傾向がある子どもの割合は、9・11歳女子が全国トップとなるなど、5～17歳の男女・年齢別の全26区分で全国平均を上回っている。この状況は以前から見られ、県では子どもの食事や運動、生活リズムの改善のため、令和3年度に県小児科医会が作成した「小児肥満対策マニュアル」を学校に配布して教員に活用を促すなどの取り組みを進めている。

一方で、これも文部科学省が実施している「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の令和3年度の結果によると、小・中学校の1,000人当たりの不登校児童生徒数は、全国平均が25.7件なのに対し、宮城県では30.3件と全国で2番目に多かった。

こうした状況を踏まえ、国立花山青少年自然の家では、従来、肥満傾向のある児童生徒を対象に実施していた「カラダにeキャンプ」を見直し、令和3年度から心や体に課題を抱えていたり、生活習慣の乱れが見られたりする児童生徒を対象に「ココロとカラダにeキャンプ」を実施してきた。

eキャンプの「e」とは、仲間と共に食事（eat）や運動（exercise）、早寝（early to bed）早起き（early to rise）などの基本的な生活習慣を見直し、改善していこうとする態度や豊かな心（emotion）を育もうとするものである。

本報告書は、この3年間の取り組みをまとめたものである。実際に子ども達に寄り添って活動した職員等が感じた経験したこと、成果等をわかりやすく記載するのは大変難しく、アンケートデータ中心になるのを御容赦いただきたい。

最後に、本事業の実施並びに報告書の作成に御尽力いただいた実行委員諸氏に感謝申し上げます。

国立花山青少年自然の家 所長 妹尾 剛

目次

1 これまでの eキャンプ

- (1) 経緯 3
- (2) 令和2年度 4
- (3) 令和3年度 5～6

2 令和4年度の eキャンプ

- (1) 概要 7～8
- (2) 第1回 9
- (3) 第2回 10
- (4) 第3回 11
- (5) 3回を通して 12
- (6) 成果と課題 13～14

3 調査について

- (1) 調査の概要 15～16
- (2) 自尊心(ココロ)に
関する調査 17～20
- (3) 身体活動(カラダ)に
関する調査 21～22

4 3年間の 取り組みから

..... 23～24

5 実行委員から 25



1 これまでのeキャンプ

(1) この事業の経緯

平成23年

宮城県の肥満傾向児の出現率の増加が見られる。

【平成22年度「学校保健統計調査」(文部科学省)より】

宮城県内の小学4～6年生を対象に生活習慣の改善を目的とした「カラダにeキャンプ」を開始

平成24年

平成23年3月11日に発生した東日本大震災以降、被災地における参加者たちの運動不足が課題となった。

対象を岩手県・福島県の小学4年生～中学3年生に拡大する

令和2年

- ・令和2年2月頃から急激に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響により、生活様式の変化や長期にわたる休校を余儀なくされる。
- ・令和2年6月から学校における教育活動が再開したが、学校生活や授業において様式の変更や活動の制限、行事の縮小や中止等があった。

新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、一度は事業中止とした。

感染状況や事業のニーズを考慮し、11月に1泊2日の事業「親子でカラダにeキャンプ」を実施する

令和3年

- ・7歳、11歳、15歳、17歳を除く年齢で前年度より宮城県の肥満傾向児の出現率の増加が見られる。【令和元年度「学校保健統計調査」(文部科学省)より】
- ・宮城県内において不登校児童生徒数が4年連続で増加が見られる。

【令和元年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」

(文部科学省)より】

(不登校の要因として「無気力・不安」「いじめを除く友人関係をめぐる問題」「親子の関わり方」「生活リズムの乱れ・遊び・非行」が多く挙げられている)

生活習慣の改善に加え、豊かな心の育成をねらいとした「ココロとカラダにeキャンプ」を実施する

令和4年

- ・宮城県の肥満傾向児の出現率は、男女ともにほぼ全ての年齢で全国値より高く、性別や年齢によっては全国1位、2位になっている。

【令和2年度「学校保健統計調査」(文部科学省)より】

- ・宮城県内においての不登校出現率は、小学校は前年度より増加し、中学校では減少しているものの全国的に比べては依然高い状況にある。

【令和2年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」

(文部科学省)より】

より仲間との関わりを重視して豊かな心を育むことをねらいとした「ココロとカラダにeキャンプ」を実施する

(2) 令和2年度 「親子でカラダにeキャンプ」

1. 目的

食事の摂り方や運動不足などに悩む児童生徒が、食事(eat)や運動(exercise)、早寝早起き(early to bed and early to rise)など基本的な生活習慣を見直し、改善を図るキャンプを体験することにより、家庭において規則正しく、健康で楽しい生活をしようとする態度を育てる。

2. 日程とプログラム内容

主な活動の様子

11月7日(土)



【e仲間との出会い】
ゲームを通して仲間づくりをしました。

【カラダにeカフェ】
参加者の生活習慣について情報交換しました。



【カラダにe食事のとり方】
食品をはたらきごとに分類したり、バランスのいい献立を考えたりしました。



【カラダにe秋季運動会】
親子で力を合わせてゴールを目指します。

【カラダにe野外炊事】
自分たちの手で1からカレーを作りました。



【カラダにeダンス】
リズムに乗ってカッコよくダンスしました。



11月8日(日)



【カラダにeハイキング】
声をかけ合いながら紅葉の進む御駒山を登りました。

頂上で食べるお弁当は格別でした。



【修了証授与】
1泊2日を振り返って、これからの生活への気持ちを新たにしました。



3. プログラム構成の意図

- 「カラダにeキャンプ」実行委員会の組織および協力団体との連携による幅広い専門分野からの意見を活動プログラムに反映し、実施する。
- 親子対象の事業にすることで、家庭に戻ってからの生活改善の意識の継続を目指す。
- キャンプの2週間後に追跡調査を実施し、家庭での生活を振り返らせることで、規則正しい生活習慣や運動などを継続しようとする意識をもたせる。

4. 成果と課題

成果

- ① 多くのプログラムに親子で取り組むことで、家族ぐるみで生活習慣改善のきっかけ作りやキャンプ後の家庭における生活習慣改善の意識の継続に成果が見られた。
- ② 宿泊室や野外炊事の活動を親子別にし、参加児童が保護者の手を借りずに活動することで、生活習慣に対する意識や自立心の向上につながった。
- ③ 運動会やダンスなどの協力団体との連携によるプログラムでは、専門的な知識や技術に基づいた指導を行うことで、参加者にとって活動成果や満足感の高いものとなった。

課題

- ① 児童が抱える生活習慣の課題は運動や食生活に関するものだけでなく、メディアコントロールや睡眠に関するものも多くなってきているため、その課題にも対応できる事業を企画する必要がある。
- ② キャンプの成果を数値的に判断するものがなかったため、活動量や歩数など成果を図る基準を設定するといった手立てを講ずる必要があった。

(3) 令和3年度 「ココロとカラダにeキャンプ」

1. 目的

食事の摂り方や運動不足などに悩む児童生徒が、食事(eat)や運動(exercise)、早寝(early to bed)・早起き(early to rise)など基本的な生活習慣を見直し、改善を図ろうとする態度を育てるとともに、自然体験活動にたっぴりと取り組むことで自己肯定感を高めるなど、豊かな心(emotion)を育む。

2. 日程とプログラム内容

		主な活動の様子			
第1回「国立花山青少年自然の家」	8月7日(土)～9日(月)				
		アイスブレイク (参加者対象) 力を合わせて課題を解決することで仲間づくりをしました。	eカフェ (保護者対象) 保護者のみなさんと情報交換をしました。	講義・演習 (親子対象) ココロとカラダにe食事のとり方や毎日元気に活動するための運動や睡眠のポイントについて親子で学びました。	ベガルタ仙台と運動会 (親子対象) 楽しみながら体を動かすことを教えてもらいました。
第2回「宮城県松島自然の家」	9月18日(土)～20日(月)				
		ダンスレッスン 最終日に発表するダンスの振り付けを覚えてもらいました。グループごとのソロパートもあり、練習に力が入ります。	トレッキング グループごとに地図をたよりにポイントを回り、ミッションをクリアしました。	シーカヤック 初めてのシーカヤック、声と力を合わせて無人島を目指しました。	砂浜での活動 砂浜では、ビーチフラッグならぬビーチリングを楽しみました。
第3回「国立花山青少年自然の家」	11月6日(土)～7日(日)				
		野外炊事 第1回、第2回と協力しながら行ってきたカレー作り、最終回は家族のみんなにふるまいました。	御駒山ハイキング みんなで声を掛け合いながら、御駒山の頂上を目指しました。急な斜面も仲間と一緒に頑張りました。	活動レポート報告 活動レポートでおうちの方にキャンプの成果を報告しました。	修了証授与 修了証を受け取り、これからの生活への決意を新たにしました。

主な活動の様子

3回を通して



スタント準備

どのようなスタントにするか、グループで話し合い、練習を重ねました。



ダンス練習

グループごとに振り付けを教え合いながら練習しました。



野外炊事

3回を通して、野外炊事に取り組みました。
第2回には1日3食をすべて自分たちで作製し、食生活に対する関心を高めました。
回数を重ねるにつれ、手際もよくなってきました。
eキャンプで作ったメニューを家でも作ってみたい人もいました。



ソロトレ

いろいろな運動にサーキット形式で取り組みました。ソロですが、お互いに声をかけ合い、楽しみながらできました。



活動の記録

歩数など毎日の頑張りを記録しました。
キャンプ中以外も家で記録をしました。

3. プログラム構成の意図

- 「ココロとカラダにeキャンプ」 実行委員会の組織及び協力団体との連携による幅広い専門分野からの意見を活動プログラムに反映し、実施する。
- 3回にわたってキャンプを実施することで、継続的に改善の意識をもたせ、習慣の定着を目指す。
- 各キャンプの2週間後に追跡調査を実施し、家庭での生活を振り返らせることで、規則正しい生活習慣や運動などを継続しようとする意識をもたせる。
- 自然体験活動に取り組むことやグループで活動することにより、達成感や満足感を味わうことや他者との関わり・協力を通して、自己肯定感を高める。

4. 調査研究について

全4回、同様の内容で調査を行い、変容を見取る

第1回

第2回

第3回

調査①

調査②

調査③

調査④

5. 成果と課題

成果

- ①第1回の初日に食事・運動・睡眠に関する講義演習を取り入れ、保護者と一緒に参加することで、家庭に帰ってからも保護者の協力を得ながら生活習慣を改善しようとする意識づけにつながった。
- ②3回のキャンプにおいて、スタント準備やソロトレーニング、野外炊事に継続して取り組むことで自身の変化や成長を実感し、自信をもって取り組むことができるようになっていった。また、ダンス練習や活動の記録は家庭においても継続して取り組むことで、生活習慣改善に対する意識の持続や運動習慣の定着を意識づけることができた。
- ③運動会やダンスなどの協力団体との連携によるプログラムでは、専門的な知識や技術に基づいた指導を行うことで、参加者にとって活動成果や満足度の高いものとなった。
- ④難易度の高いプログラムに取り組んだことや、グループごとに活動に取り組んだことで、自尊感情尺度の調査において、変容がみられる項目があった。

課題

- ①今回、ほとんどの活動をグループごとに行ったが、グループによって活動状況や関わり方に大きな差が見られた。事前のアンケートや調査をもとにグルーピングを行い、大きな差が出ないように配慮していきたい。
- ②事業期日を3回に分けたことで、キャンプ開催までの期間に実践意欲の低下がみられた参加者が一部いた。キャンプ間の意識の継続を図るため、オンラインによる参加者同士の交流や情報交換の機会を設定するべきか検討の余地がある。

2 令和4年度のEキャンプ

(1) 概要

1. 目的

食事のとり方や運動不足などに悩む児童生徒が、食事(eat)や運動(exercise)、早寝(early to bed)・早起き(early to rise)など基本的な生活習慣を見直し、改善を図ろうとする態度を育てるとともに、仲間との関わりや自然体験活動を通して自己肯定感を高めるなど、豊かな心(emotion)を育む。

2. 構成

第1回【導入】

8月11日(木)～13日(土)

花山青少年自然の家



仲間とコミュニケーションを図りながら、沢登り、野外炊事等の体験活動を行い、豊かな心を育む。また、仲間と共にバランスのとれた食事の摂取、身体を動かす習慣づくり、規則正しい生活リズムについて考え、確立を図ることをテーマにキャンプを実施する。

第2回【展開】

9月17日(土)～19日(月)

花山青少年自然の家・松島自然の家



仲間と再会し、基本的な生活習慣の再確認、継続を図るとともに、ウォークラリー等の活動を通して、自分自身の生活を健全にしていくスキルを高める。また、第1回に続き、野外炊事に取り組むことで食生活に関する意識やスキルを高める。

第3回【まとめ】

11月5日(土)～6日(日)

花山青少年自然の家



御駒山を協力して登り切ることで達成感を得るとともに、仲間との絆を深める。参加者全員で3回のキャンプを振り返り、野外炊事、ダンス発表会などまとめの活動を行う。また、自分の成長を感じ、今後の生活の目標を設定し、さらなる成長を目指す。

3. 実行委員・協力団体

【実行委員】(五十音順)

虻川 大樹 氏 宮城県立こども病院
色川 洋二 氏 宮城県教育庁生涯学習課
大塚 達以 氏 東北大学大学院医学系研究科
岡崎 勘造 氏 東北学院大学教養学部人間科学科
妹尾 剛 国立花山青少年自然の家

【協力団体】

株式会社 ベガルタ仙台
7color dance studio

4. 参加者

	男子	女子
小学4年生	7名	5名
小学5年生	2名	3名
小学6年生	1名	2名
中学1年生	1名	2名
合計		23名

※すべて宮城県内からの参加



5. 日程とプログラム内容

第1回		
8/11(木)	8/12(金)	8/13(土)
国立花山青少年自然の家		
	起床・健康観察	起床・健康観察
	つどい・朝食	野外炊事 朝食を作ろう (豚肉と夏野菜の南蛮丼)
	活動準備	
集合・受付・開講式	7 colorの先生と ダンスタイム	活動準備・部屋点検
子:アイスブレイク 親:eカフェ		
親子: 生活習慣と食事のとり方		沢登り(下流) 花山の沢を楽しもう!
昼食(食堂)	昼食(食堂)	
親子: 生活リズムと運動と睡眠	休憩・活動準備	昼食(バランス弁当)
	創作活動 (スプーンづくり)	沢登り(下流) 花山の沢を楽しもう!
		振り返り
	休憩・活動準備	解散
親子:ペガタ山台と エンジョイエクササイズ		
タベのつどい	野外炊事 カレーを作ろう (カレー・チョレギサラダ)	
夕食(食堂)		
休憩		
eキャンプの目標設定	片付け・休憩	
長縄跳び	長縄跳び・ダンスタイム	
ソロトレニング (オリエンテーション含む)	ソロトレ	
入浴	入浴	
活動の記録	活動の記録	
就寝	就寝	



第2回		
9/17(土)	9/18(日)	9/19(月)
花山青少年自然の家	県立松島自然の家	
	起床・健康観察	起床・健康観察
	つどい・朝食	つどい・朝食
	活動準備・部屋点検	活動準備・部屋点検
集合・受付 これまでの振り返り	バスで松島に移動	月浜～大浜ウォーキング (月浜にて自由遊び)
沢登り(上流) 花山の沢を楽しもう!		
	活動準備	
	昼食(バランス弁当)	昼食(食堂)
昼食(バランス弁当)		振り返り
		解散
沢登り(上流) 花山の沢を楽しもう!	ウォークラリー 松島の海を楽しもう!	
休憩・活動準備		
長縄跳び		野外炊事 松島でカレーを作ろう! (カレー・かみかみサラダ)
タベのつどい		
夕食(食堂)		
荷物準備・積み込み		
ダンスタイム	長縄跳び・ダンスタイム	
休憩・活動準備		
ソロトレ	ソロトレ	
入浴	入浴	
活動の記録	活動の記録	
就寝	就寝	



第3回	
11/5(土)	11/6(日)
国立花山青少年自然の家	
	起床・健康観察
	最後の野外炊事 朝食を作ろう! (きのこのシチュー)
集合・受付 これまでの振り返り	活動準備・部屋点検
御駒山ハイク	長縄跳び・ダンスタイム
	振り返り
	昼食(食堂)
	休憩
山頂で昼食(弁当)	長縄跳び・ダンス発表会 アンケート記入
御駒山ハイク	報告会・閉講式・解散
休憩	
長縄跳び・ダンスタイム	
タベのつどい	
夕食(食堂)	
ソロトレ	
キャンドルサービス (eキャンプの振り返り これからの目標)	
入浴	
活動の記録	
就寝	



6. プログラム構成の意図

- 昨年度に続き、「ココロとカラダにeキャンプ」実行委員会の組織及び協力団体との連携による幅広い専門分野からの意見を活動プログラムに反映し、実施する。
- 3回にわたってキャンプを実施することで、実施時期や実施場所ならではの多様なプログラムを体験するとともに、継続的に生活習慣改善の意識をもたせる。
- 各キャンプ開始前、終了後の計6回の追跡調査を実施し、学校や家庭での生活を振り返らせることで、規則正しい生活習慣や運動などを継続しようとする意識をもたせる。
- 自然体験活動に取り組むことで、達成感や満足感を得ることにつなげ、他者との関わり・協力を通して、自己肯定感を高めていく。
- 楽しみながら運動量を確保できるプログラム(松島ウォークラリー、沢登り上流・下流など)を実施することで運動への意欲を高めていく。
- 長縄跳びをプログラムに入れたり、野外炊事をカセットコンロで行ったりするなど今回の活動を学校や家庭でも生かせる内容にして実施する。

(2) **第1回** 期日：8月11日(木)～13日(土) 2泊3日

会場：国立花山青少年自然の家



主な活動の様子



講義・演習(親子対象)



講義・演習(親子対象)



ベガルタ仙台とエクササイズ
(親子対象)

eキャンプスタートの日。参加者のみなさんは初めての仲間との出会いで緊張した様子でした。午前、親子で病院の先生や大学の先生による食生活や生活習慣の講義演習に参加し、一緒に生活習慣について話し合うなど家庭での実践について考えました。午後は、ベガルタ仙台サッカースクールのコーチとベガルタチアリーダーズと一緒にサッカー教室とエクササイズを行い、体を動かすことを親子で楽しみました。



ダンスレッスン



創作活動(スプーンづくり)



野外炊事(夕食:カレー)

7color dance studioから2人の先生に来ていただき、最終日に踊るダンスのレッスンを行いました。少し難しいダンスでしたが、何度も繰り返し練習したり、グループの仲間と互いに教え合ったりする姿が見られました。第3回で保護者に向けて披露するため、この後のeキャンプと家庭で練習を重ねて意欲が高まりました。創作活動では、世界に一つだけのスプーンを作りました。持ち手を削り、オリジナル焼き印を入れて完成です。「家に帰ってもこれでご飯を食べる」と喜ぶ参加者もいて、食に対する興味をもつきっかけになりました。夕食は初めての野外炊事(カレーライスづくり)に挑戦。話し合って役割分担し、協力してカレーを作りました。「自分たちで作ったカレーはいつも以上においしく感じる」との声もありました。創作活動で作ったスプーンを使って、みんな笑顔で食事を楽しみました。



野外炊事(朝食:南蛮丼)



沢登り(下流コース)



第1回eキャンプ最終日となる3日目。朝食は豚肉と夏野菜の南蛮丼を作りました。2回目の野外炊事のため、1人1人が自信をもって取り組んでいました。朝からしっかり食べてエネルギーをチャージしました。朝食を作る大変さや朝食をとる大切さを実感しました。

最終日のメインプログラムは沢登り(下流コース)。少し肌寒い中でしたが、参加者同士、自然に声をかけ合う姿が見られ、互いに励まし合って全員でなんとか登り切りました。ゴールした参加者の顔は晴れ晴れとしていました。やり切った充実感の中、第2回のキャンプで会う約束をして、笑顔で解散となりました。

(3) 第2回 期日：9月17日(土)～19日(月) 2泊3日 会場：国立花山青少年自然の家・宮城県松島自然の家

主な活動の様子



1ヶ月ぶりの再会



沢登り(上流コース)

1ヶ月ぶりの再会。緊張の様子もなく、すぐに明るい声が聞こえてきました。第2回は「がんばるぞー、おー！」のかけ声で心を1つにして、沢登りからスタート。今回は上流コースに挑戦です。険しい道を進んだり、滝を登ったりなど大変な活動でしたが、声をかけたり、手を貸したりと、助け合ってゴールへたどり着きました。達成感にあふれた表情を見ることができました。この経験でまた仲間との絆が強くなりました。



ウォークラリー ～松島の海を楽しもう～



野外炊事(夕食:カレー)

2日目はバスに乗って、宮城県立松島自然の家へ移動。台風の接近の影響でシーカヤックが行えず、宮戸島をめぐるウォークラリーを行いました。初めての場所で仲間と相談しながら、ミッションをクリアし、ゴールを目指しました。地図を確認する人、時間を管理する人、歩くペースを調整する人など、一人一人がグループのために力を発揮しました。夢中になって活動し、ゴール後に歩数計を確認すると「こんなに歩いたんだ」とびっくりしていました。

野外炊事は2度目のカレー作り。前回よりもスムーズに役割分担し、ウォークラリーの疲れも見せず、手際よくおいしいカレーを作りました。「みんなと一緒にだよりおいしい」と食が進みました。



月浜～大浜までウォーキング

第2回最終日は、天候を見ながら月浜から大浜までウォーキングを行いました。前日のウォークラリーで道が分かりづらかったポイントをみんなで確認し、月浜海岸へ。月浜海岸では、からだいっぱい使って仲間と海を満喫しました。何も道具がなくても、その場で遊びを作り出し、グループの枠を越えて、仲間との時間を過ごす様子が見られ、さらに絆が深まりました。

次に会うのは11月です。少し名残惜しうにしながらも、また再会することを楽しみに解散となりました。

(4) **第3回** 期日：11月5日(土)～6日(日) 1泊2日

会場：国立花山青少年自然の家

主な活動の様子



御駒山ハイク



キャンドルサービス



いよいよ最終回となる第3回のeキャンプ。最後にして最大級の難関である「御駒山ハイク」に挑みました。沢登り同様にみんなでかけ声を掛け、心を1つにしてスタートした参加者の目の前に立ちはだかるのは急な斜面。途中でくじけそうになったり、滑る地面に思うように進めず苦戦したりする参加者もいましたが、手を貸したり、互いに励まし合ったりして頂上へ。山頂から見える花山の景色に、達成感を感じていました。夜はキャンドルサービスで静かに揺めく炎を眺めながら、これまでのeキャンプを振り返り、1人1人が思いを語りました。eキャンプを通して学んだことや、これからの生活で頑張りたいことを発表しました。



野外炊事(朝食:シチュー)



長縄・ダンス発表会



修了証授与

最終日は朝食の野外炊事からスタートしました。メニューは心も体も温まるきのこのクリームシチューです。きのこが苦手な参加者も自分で作ったことで「できるだけ食べてみよう」と挑戦していました。

保護者に向けた発表会では、長縄跳びとダンスを披露しました。よりよいものを見てもらおうと、発表の直前まで練習に余念がありません。約50名の前で堂々と発表し、たくさんの拍手をもらうことで、目標に向かって努力した成果を感じていました。

参加者1人1人に修了証を授与され、別れを惜しんで泣いてしまう参加者や「また来年も来たい。」と話す参加者もいて、eキャンプが参加者にとって、とても楽しく、充実したものになったことを感じる事ができました。

(5) 3回を通して

主な活動の様子



① ダンス



レッスンを受け、発表会に向けてダンスに取り組みました。グループごとに見せ場となるソロパートがあり、キャンプとキャンプの間は、レッスン動画を見ながら自宅で練習を重ね、楽しみながら体を動かす習慣づくりを目指しました。

② 長縄跳び



学校や家庭でも取り組める長縄跳びを取り入れました。音楽に合わせて8の字跳びを中心に様々な跳び方にチャレンジしました。たとえ引っかかって「大丈夫」「もう一回やってみよう」と励まし合ってみんな上手に跳べるようになりました。

③ ソロトレーニング



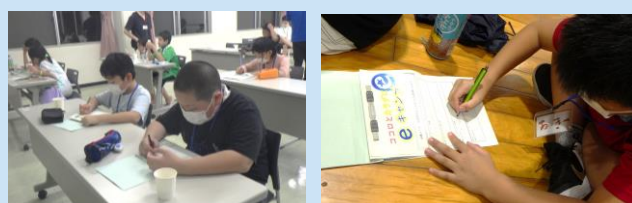
柔軟体操、ボール運動や器具を使ったトレーニングなど、跳んだり投げたりと様々な体の動きができるよういくつかブースを作りました。音楽に合わせてローテーションで全種目回りました。

④ 野外炊事



計4回の野外炊事で食に対して興味をもち、考える機会になりました。メニューは栄養バランスがよく、家庭でも作れるものにしました。また、コミュニケーションをとりながら役割分担をすることで、調理・片付けがスムーズにでき、自信がついた様子が伝わってきました。

⑤ 振り返り



毎日、振り返りを行いました。その日に頑張れたことや友達との関わりについて振り返ることで、自分の成長や友達の良さに気付くきっかけになりました。また、一日の歩数を記録することで運動量を可視化し、次の取り組みで意識できるようにしました。

(6) 令和4年度の成果と課題

成果

① 仲間とのつながり



様々なプログラムの取り組みを通して、苦手なことや失敗することも含めて受け入れて共に活動できる仲間がいるという環境づくりに努めた。それにより、**安心して挑戦できる信頼関係**を築くことにつながった。また、役割分担や仲間に思いを伝える機会を作ることで、**自己肯定感の向上**に効果があったと感じる。

さらに、3回にわたって実施することで、**仲間とまた会える、学校や家庭とは別に居場所がある**という思いが芽生え、参加へのモチベーションとなった。

② 運動に対する意識の改善



運動に対するハードルを下げることを意識してプログラムを構成した。主な手立てとしては、**スモールステップで「できた」という成功体験**を重ね、「できない」から「できる」へと意識変容を図ることと、**仲間と共に活動することで楽しみながら取り組む**ことの2点である。

その結果、調査アンケートの「学校でいつも遊ぶ」割合が高まっていることから、**参加者の活動性を高める**きっかけになったといえる。

③ 家庭へのはたらきかけ



専門的な知識をもつ病院の先生、栄養士の先生、大学の先生を講師として、親子対象の基本的な生活習慣に関する講義演習を行うことで、**家庭内で一緒に生活習慣を見直し、改善を図るきっかけ**となった。

また、保護者向けのプログラム「eカフェ（座談会）」では、講師も一緒に参加し、質疑応答の時間を設けたことで、**個の困り感に対応**する機会を提供することができた。

④ 参加者満足度の向上



キャンプ後のアンケートにおいて第1回、第2回、第3回と回を重ねるにごとに、参加者の満足度が上がっていく傾向が見られた。**人間関係の構築、実施時期や場所に合わせた多様な体験活動、系統立てたプログラム構成等**による成果と考えられる。

課題

① 家庭での継続

講義演習をはじめとしたプログラムを通して、基本的な生活習慣の改善に向けた意識の高まりが感じられたが、家庭に戻るとその**意欲の低下**が見られる傾向にあった。

意欲を継続し、生活習慣の改善をするためには**本人へのはたらきかけ**に加えて、**家庭でのサポート**が必要不可欠であると考え。意欲の継続および家庭での実践につながる手立てを考えなければならない。

② プログラムの検討

年齢や抱えている課題等、参加者の実態に幅があるため、**運動強度**をどの程度に設定すれば**ねらいにせまった活動**ができるかを検討する必要がある。強度が高すぎると、ケガをしたり、運動への苦手意識につながったりし、逆に低すぎると、物足りなさを感じたり、充実感や達成感を感じられなかったりする。個に応じた選択プログラムの取り入れを含め、検討の余地がある。

3 調査について

(1) 調査の概要

1. 調査項目

本事業の成果を調査するために、次の2点について調査を行った。

- ① 自尊心に関する調査
- ② 身体活動に関する調査

2. 調査対象

参加者数	男子	女子
小学4年生	7名	5名
小学5年生	2名	3名
小学6年生	1名	2名
中学1年生	1名	2名
	合計	23名

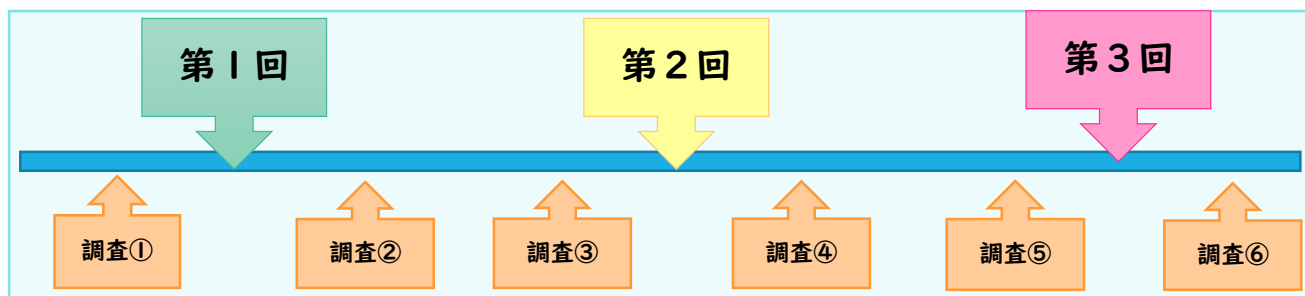
回答者数

調査①：23名
調査②：21名
調査③：20名
調査④：18名
調査⑤：19名
調査⑥：20名

※途中から不参加になった参加者がいたため、回答者数に変更あり

3. 調査方法

本事業の参加者に対し、それぞれのキャンプ前とキャンプ後の計6回、質問紙や回答フォームを使って同様の内容で調査を行い、変容を見取った。



4. 調査内容

①自尊心(ココロ)に関する調査

心の健康において、自尊心は重要であると考えられているため、参加者の自尊心について児童用ローゼンバーグ自尊感情尺度を用いて調査を行った。

②身体活動(カラダ)に関する調査

身体活動とは息切れしたり、汗をかいたりするような活動とし、参加者の運動に関する心の部分と実際にどの程度身体活動しているのかを調査した。

また、お手伝いは、上述した「息切れしたり、汗をかいたりするような活動」まで強度が高まることは少ないが、参加者の日常生活での活動量を増やすことに大切な役割を果たす。さらには「息切れしたり、汗をかいたりするような身体活動」に到達するまでの最初のステップともなり得るということで、お手伝いの状況についても調査を行った。

5. 留意点

○アンケートに対しての安心感をもって回答してもらう。アンケートの結果と学校の成績は関係ないことや1人1人の結果を他人に見せないことを伝え、自分のことを正直に回答してもらうよう工夫する。

○必ず参加者本人に回答してもらう。自分の生活について自分で振り返り回答することでより正しい調査を行うことができる。アンケートは保護者にメールで回答フォームを送るが、回答は参加者本人が行うことを事前に伝える。

アンケート内容の一部

基本的には選択項目で回答を得るが、自分の行った行動や心情など具体的などころは自由記述で回答を得るようにした。

30. この1週間で60分以上身体活動した日は何日ありましたか。それぞれの日に、あなたが身体活動についてやすすべての時間を合計してください。*

*身体活動とは、息切れしたり、汗をかいたりするようなすべての活動のことです。

- ☐ 0日
☐ 1日
☐ 2日
☐ 3日
☐ 4日
☐ 5日
☐ 6日
☐ 7日

31. 授業以外で、身体活動をどのくらいしますか。*

- ☐ 毎日
☐ 週に4~6回
☐ 週に2~3回
☐ 週に1回

44. 学校生活で困っていることや心配なことはどのようなことですか？*

回答を入力してください

45. 第2回のeキャンプのあとに困ったことがあったときに、だれかに助けってもらったことはありますか？*

- ☐ ある
☐ ない

46. 「ある」と答えた人に聞きます。どんなときに助けられましたか。*

回答を入力してください

47. 「ない」と答えた人に聞きます。助けられなかったのはどうしてですか。*

回答を入力してください



(2) 自尊心（ココロ）に関する調査

東北大学大学院医学系研究科 准教授 大塚 達以 氏

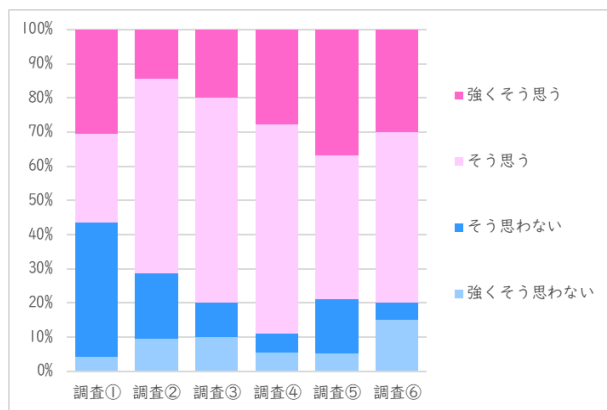
ローゼンバーグ自尊感情尺度は10項目の質問から構成され、各項目について「強くそう思う」「そう思う」「そう思わない」「強くそう思わない」の4段階で回答してもらった。逆転項目が5項目含まれており、尺度得点は10点～40点で、点数が高い方と自尊感情が高いと評価される。

ローゼンバーグ自尊感情尺度の平均・標準偏差（全体）

	平均	標準偏差
合計	27.16	6.67
わたし（ぼく）は、だいたい自分に満足している。	2.93	0.87
わたし（ぼく）は、ときどき自分はダメだと思ってしまう。	2.40	0.93
わたし（ぼく）には、いくつかの点でよいところがあると思っている。	2.97	0.80
わたし（ぼく）は、友だちがやるのと同じくらい、いろんなことができる。	2.80	0.87
わたし（ぼく）には、あまり得意なことがない。	2.73	0.96
わたし（ぼく）は、ときどき役に立っていないと感じてしまう。	2.55	0.91
わたし（ぼく）は、少なくともほかの人と同じくらい価値のある人だと思う。	2.97	0.87
わたし（ぼく）は、自分のことをもっと好きになれたらいいと思う。	2.18	1.00
わたし（ぼく）は、何をやっても失敗するのではないかと感じてしまう。	2.68	0.99
わたし（ぼく）は、これから、いろんなことができると思う。	2.96	0.89

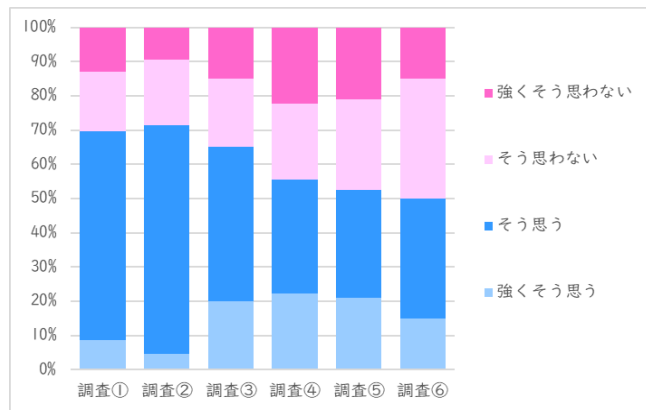
全体の平均は27.16、標準偏差は6.67だった。表には示していないが、中央値は28.0だった。年齢や性別により変動があるため単純には比較できないが、これまでの報告と比べて全体的に点数が高い傾向があった。「ときどき自分はダメだと思ってしまう」「自分のことをもっと好きになれたらいいと思う」の得点が他の質問項目と比べて低い傾向があった。

わたし（ぼく）は、だいたい自分に満足している。



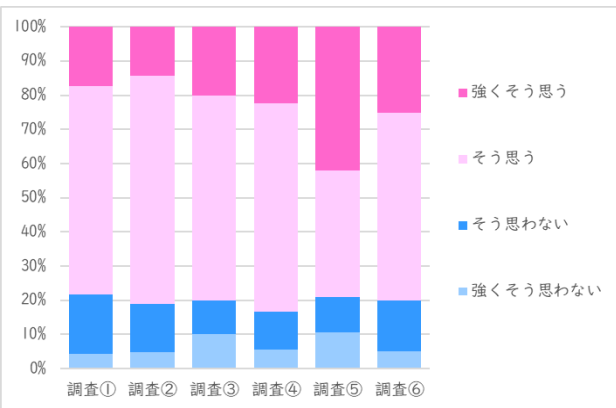
キャンプ参加前は「強くそう思う」「そう思う」と回答した参加者は55%程度だったが、その後割合は増え80%の参加者が「自分に満足している」と感じるようになっていた。

わたし（ぼく）は、ときどき自分はダメだと思ってしまう。



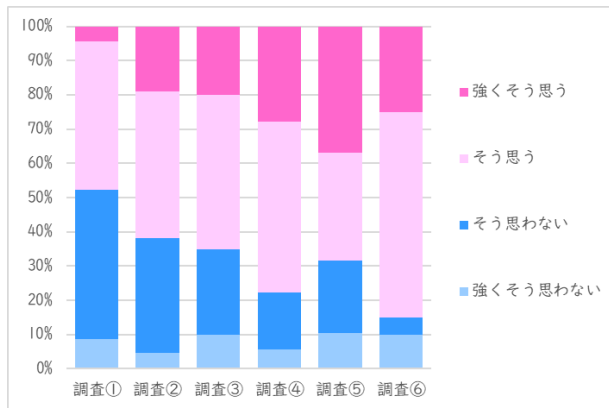
全体の平均では、他の質問項目に比べて点数が低い傾向があったが、本キャンプへの参加前後で「そう思う」「強くそう思う」と回答している参加者の割合が70%から50%に低下しており、「自分のことをダメだ」と思わなくなった参加者が増える傾向があった。

わたし（ぼく）には、いくつかの点でよいところがあると思っている。



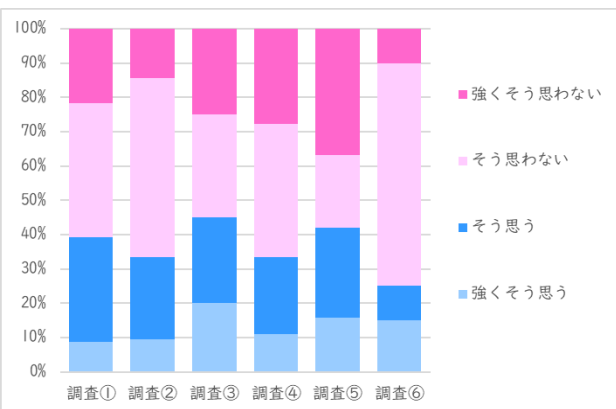
調査期間中大きく変化はなかったが、自分に良いところがあると思っている参加者は80%と高い割合だった。

わたし（ぼく）は、友だちがやるのと同じくらい、いろんなことができる。



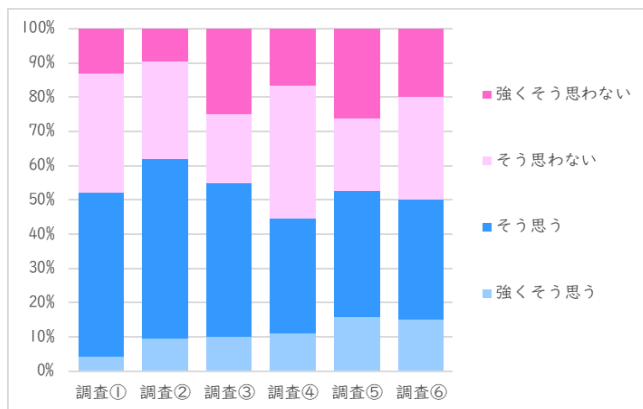
キャンプ参加前は「そう思わない」という割合が40%と多かったが、徐々にその割合が減り、3回のキャンプ終了後には「強く思う」「そう思う」を足した割合が85%と大きく変化していた。

わたし（ぼく）には、あまり得意なことがない。



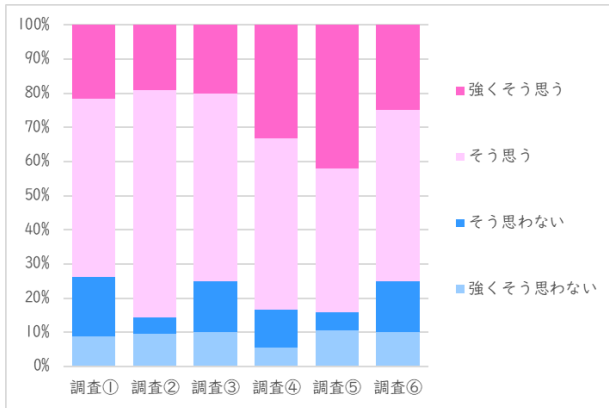
調査期間を通して一貫した傾向は見られなかったが、半数以上の参加者は得意なことがあると回答していた。

わたし（ぼく）は、ときどき役に立っていないと感じてしまう。



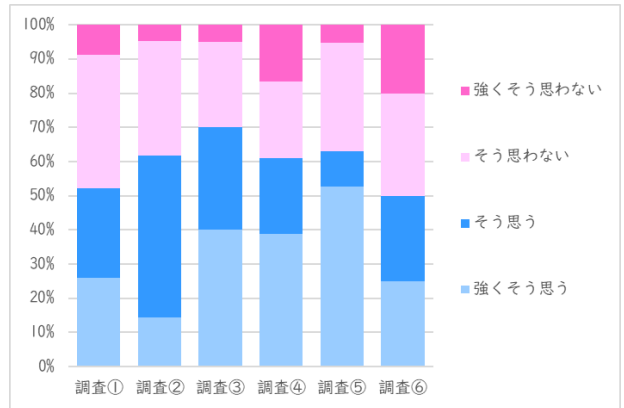
調査期間を通して全体的には一貫した傾向はなかったが、「強く思う」と回答した参加者の割合が若干増加傾向にあった。

わたし（ぼく）は、少なくともほかの人と同じくらい価値のある人だと思う。



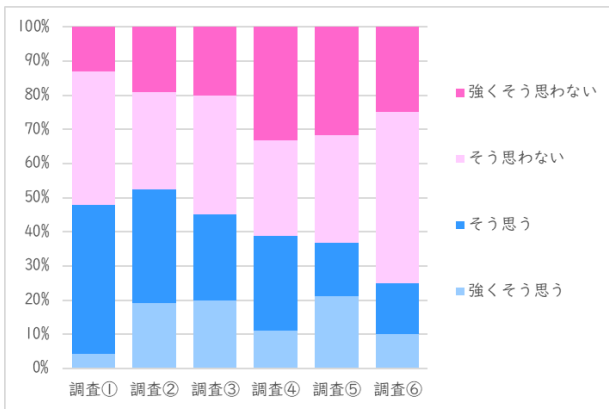
調査期間を通して大きな変化はなかったが、「強く思う」「そう思う」を加えると80%前後と高い割合を示していた。

わたし（ぼく）は、自分のことをもっと好きになれたらいいと思う。



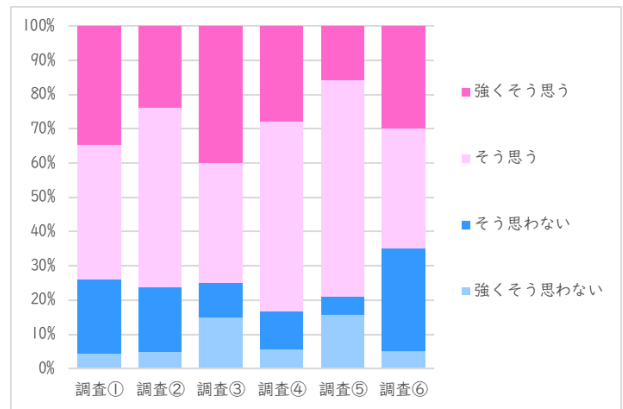
全体の平均では他の質問項目に比べて点数が低い傾向がある項目で、調査時期によっても回答内容に変動があり一貫した傾向はなかった。自分のことを好きと思う参加者の割合は第2回のキャンプ前後で30-40%と減少していたが、第3回目のキャンプ後にはキャンプ参加前と同様となっていた。

わたし（ぼく）は、何をやっても失敗するのではないかと考えてしまう。



第1回キャンプの前後では半分くらいの参加者が、失敗することへの不安があったが、徐々にその割合は減少し、3回のキャンプ終了後には75%の参加者が失敗への不安を感じないと答えるようになった。

わたし（ぼく）は、これから、いろんなことができると思う。



調査の時期によって変動が大きく、一貫した傾向は見られなかったが、全体的には「強く思う」「そう思う」を加えた割合が70%前後と高かった。

①「学校生活で困っていることや心配なことはどのようなことですか？」

ほとんどの参加者が「ない」と回答し、困ったことを記載した参加者においてはその内容はおおよそ同じ内容となっていた。第1回キャンプ前では（23名回答）、「ない」と回答している参加者が14名、交友関係での悩みが4名、勉強面での悩みが2名、その他が3名だった。第3回目のキャンプ後では（20名回答）、「ない」と回答している参加者が13名、交友関係関連での悩みが4名、勉強面での悩みが1名、その他が2名だった。点数が増加している参加者では困ったことは「ない」と回答する割合が高く、一方で点数が減少している参加者は具体的に記載する傾向があった。

②-1「これまで学校で困ったことがあったときに、だれかに助けてもらったことはありますか？」

第1回キャンプ前（23名回答）に行った調査では「ある」が20名で「ない」が3名だった。第3回キャンプ後（20名回答）に行った調査では、「ある」が12名、「ない」が8名だった。

②-2「『ある』と答えた人に聞きます。どんなときに助けてもらいましたか。」

それぞれのキャンプ参加直前のアンケートでは学校や家での場面、キャンプ参加直後ではキャンプで経験した場面だった。

②-3「『ない』と答えた人に聞きます。助けてもらえなかったのはどうしてですか。」

「助けてほしいと思う場面がなかった」「大丈夫だった」ということが多かったが、中には「言えなかった」「迷惑をかけたくなかった」と回答した参加者がいた。

③「最近、だれかを助けたことはありましたか。あればどんなことだったか教えてください。」

「ない」と回答する参加者が多かったが、具体的に記載した参加者の回答からは「忘れ物をした友達に貸してあげた」「友達に勉強を教えた」「けんかの仲裁をした」など友達に対する内容が多かった。

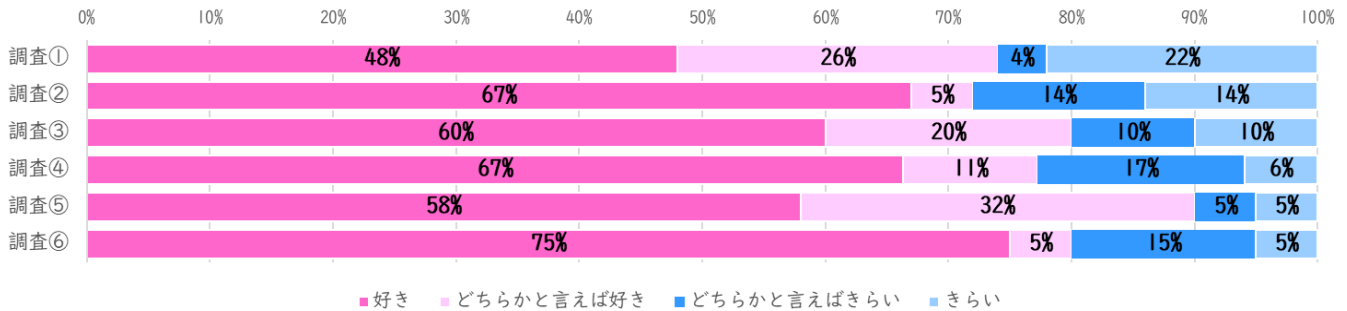
結果からの考察

本調査を行った期間におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の点数の変化について、一定の傾向が見られた項目と、調査時期によって変動が大きく一貫した傾向が見られない項目がありました。点数が上昇した項目は、「わたし（ぼく）は、ときどき自分はダメだと思ってしまう（逆転項目）」「友達がやるのと同じくらい、いろんなことが出来る」「わたし（ぼく）は、何をやっても失敗するのではないかと考えてしまう（逆転項目）」でした。キャンプでの経験を通して様々な成功体験をすることができ、「失敗をするのではないか」という不安の軽減や「友達がやるのと同じくらい、いろんなことが出来る」と感じるようになって、自分に自信を持つようになって「自分はダメだ」と思うことが減っていった可能性はあります。本キャンプには様々なプログラムが用意され、新たなチャレンジをする機会がありました。自由記載の「どんなときに助けてもらいましたか」の回答には、キャンプの活動中に周りから助けてもらったという内容も多く、助けがあるという安心感が失敗への不安を軽減させ、チャレンジを後押ししていると思われました。困った時に周囲に助けを求め、助けてもらった経験から今度は自分が周りを助けようと思う、そのような良い循環が生まれる中で、参加者達の自尊心が育まれていくように思われます。

(3) 身体活動に関する調査

東北学院大学教養学部人間科学科 准教授 岡崎 勘造 氏

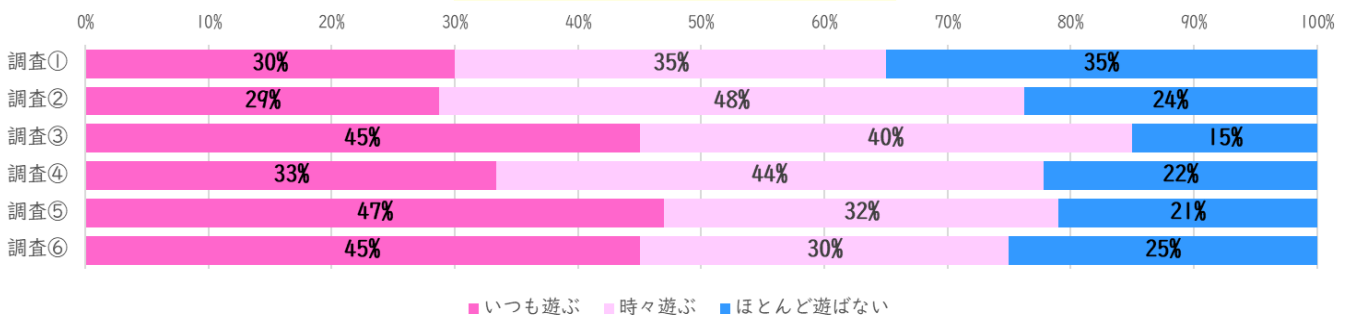
体を動かすことは好きですか



ココロとカラダにeキャンプへ参加する前と比べて、「好き・どちらかと言えば好き」の割合は調査①から調査⑥まで順に74%、72%、80%、78%、90%、80%とキャンプを通して若干高まっているように見える。調査①で74%は「好き・どちらかと言えば好き」と回答しており、身体を動かすことに好意的な参加者が集まっていた。

キャンプ前に「嫌い」と回答していた1名はキャンプを通して変化が見られ、調査⑥には「どちらかと言えば好き」と運動への趣向が好転していた。20名程度の参加者のうち1名のみではあるが、そもそも身体を動かすことに好意的ではない参加者が身体を動かすキャンプを行い続けたことに本企画の魅力があると思われる。自然体験を通した生活習慣改善プログラムが運動の動機づけとその定着に役立つ可能性がかいま見れた。

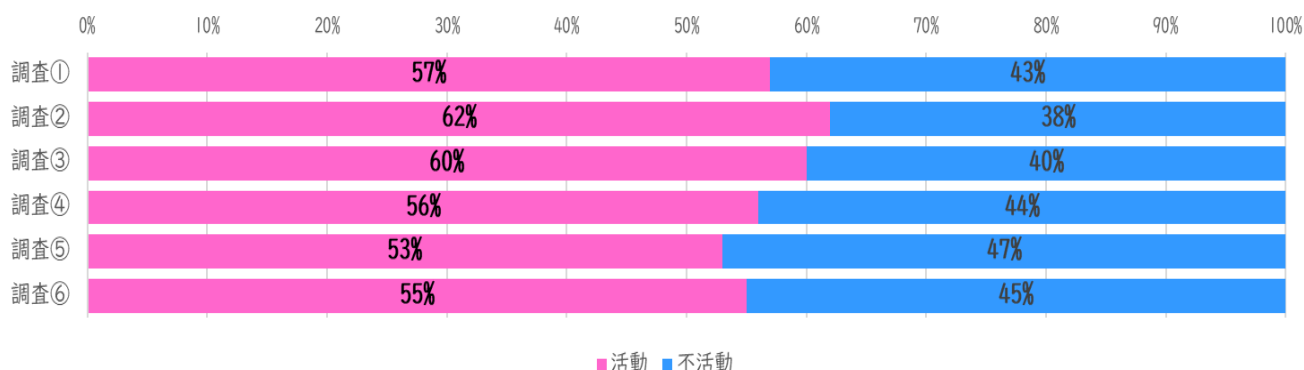
休み時間や放課後に外で遊びますか



ココロとカラダにeキャンプへ参加する前と比べて、学校時間の休み時間や放課後に「いつも遊ぶ・時々遊ぶ」の割合は調査①から調査⑥まで順に65%、77%、85%、77%、79%、75%と調査①の割合から高まっていたが、その割合は調査③の85%をピークに戻りつつあった。具体的には、調査⑥の「いつも遊ぶ・時々遊ぶ」の割合（75%）は、調査①（65%）と比べて10ポイント上昇していたが、調査③（85%）と比べると10ポイントの低下であった。一方、「いつも遊ぶ」と回答した参加者のみの割合に着目すると、調査①（30%）から調査⑤（47%）と調査⑥（45%）ではおよそ15ポイント高まっていた。これらのことから、確かに調査⑥では「いつも遊ぶ・時々遊ぶ」参加者の割合は戻りつつあるが、それでも調査①よりは高値を維持し、かつ「いつも遊ぶ」参加者の割合は高まっていることから、ココロとカラダにeキャンプは学校時間における参加者の活動性を高めるきっかけづくりに貢献できた可能性が考えられる。

今回のキャンプの中で、「どのプログラムが、参加者の学校時間の休み時間や放課後に外での遊びを促していたのか」あるいはさらに強化すべきか、その要因を検討し次年度以降のプログラム作りに活かされることを望む。

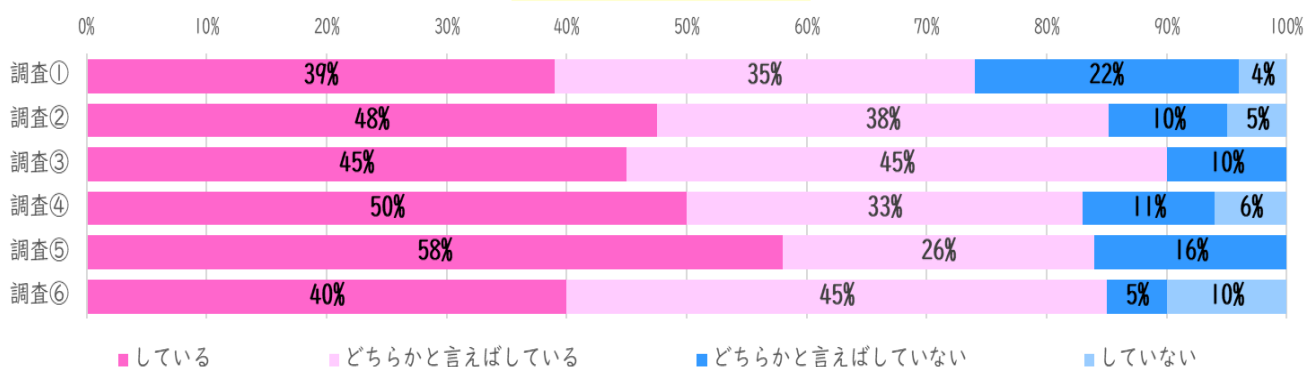
授業以外の活動状況



「授業以外の活動状況」は、『授業以外で、身体活動をどのくらいしますか』の質問に対し「週に2～3回」以上と回答し、かつ『授業以外で、身体活動を1週間に何時間しますか』に「およそ1時間」以上と回答した参加者を「活動」とし、それ以外を不活動と分類した。「活動」と分類されれば、国内外で示されている指針基準をある程度満たしていると考えられる。

「活動」に分類された参加者の割合は調査①から調査⑥まで順に57%、62%、60%、56%、53%、55%と若干の変化は見られるがほぼ変わらなかった。この割合は上述した学校での活動（休み時間、放課後）以外の活動状況も含まれる。つまり、学校以外の時間での遊びなども反映された一日あたりの活動状況と捉えられる。その割合は調査①とほぼ変わらないという結果だった。学校以外の活動において、「息切れしたり、汗をかいたりするような身体活動」までを高めるためには自己効力感が大切な要素の1つとして期待できる。自己効力感を高められるように、参加者が「息切れしたり、汗をかいたりする」活動への自己への信頼感や有能感を実感できる方策を更に検討すべきかもしれない。

お手伝いはしていますか

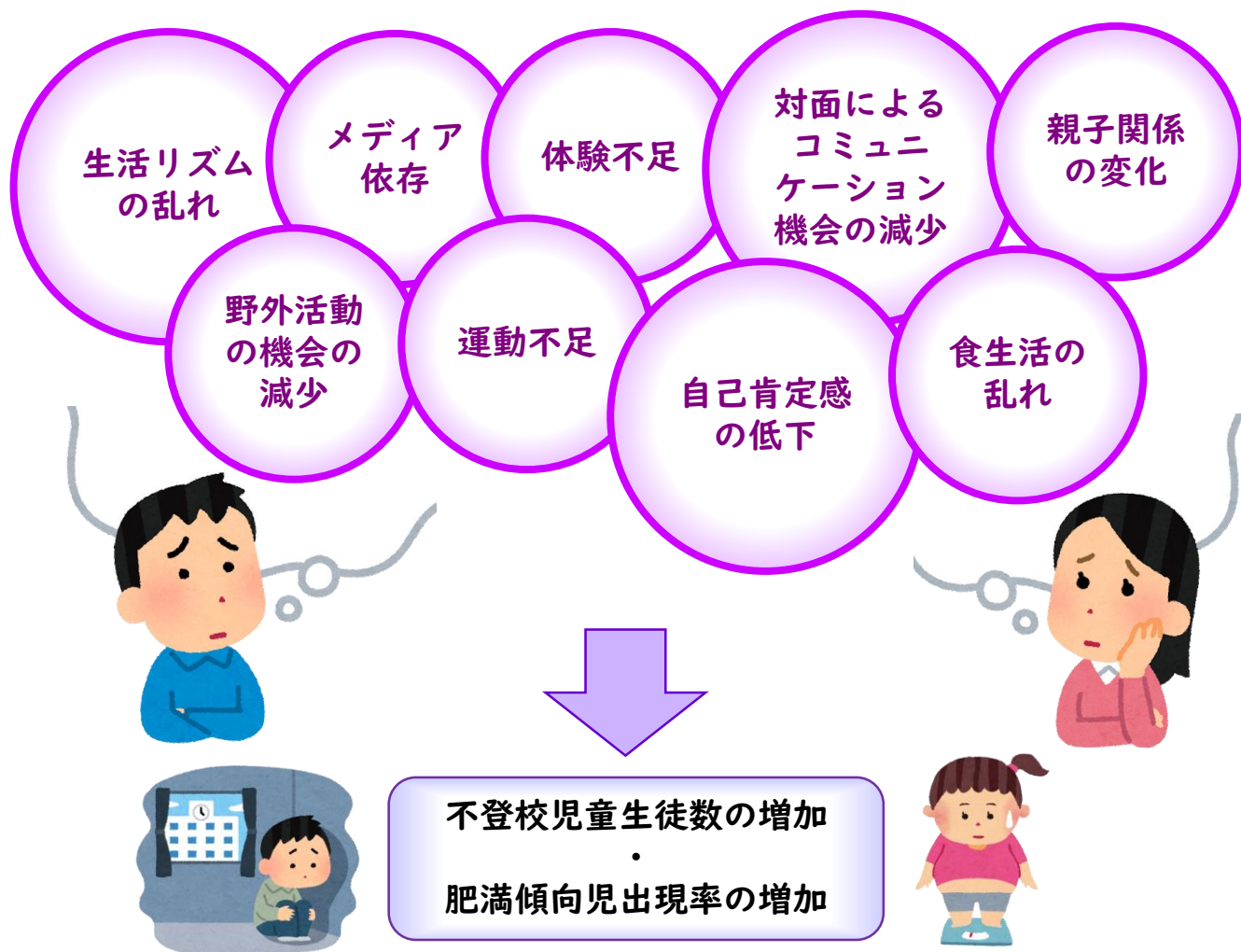


ココロとカラダにeキャンプへ参加する前と比べて、お手伝いを「している・どちらかと言えばしている」と回答した参加者の割合は、調査①から調査⑥まで順に74%、86%、90%、83%、84%、85%であった。つまり、キャンプに参加することによってお手伝いに積極的な態度を示す参加者の割合は9から16ポイント高まっていた。20名の参加者のうち1名ではあるが、調査①で「どちらかと言えばしていない」から「どちらかと言えばしている」に変容していた。

キャンプでの講話や食事づくり体験を通して、お手伝いをすることへの行動変容を促すきっかけづくりとなるようプログラムを強化することが来年度以降の課題となった。

4 3年間の取り組みから

青少年が抱える様々な課題



課題の解決のために、以下のようなアプローチが有効なのではないかとの仮説のもと、「ココロとカラダにeキャンプ」を実施

豊かな心の育成

共同生活

親元を
離れての宿泊

全3回
合計
5泊8日の
キャンプ

自然体験
活動

講義演習

多様な
プログラム

生活習慣の改善

事業
アンケート

参加者の
姿

振り返り
の記述

調査研究
結果

参加者の
声

保護者
の声

キャンプの取り組みは、「豊かな心の育成」「生活習慣の改善」という観点で、参加者の課題解決に向けて一定の成果があると考えられる。

成果につながったと考えられる主な手立て

3回開催

7泊8日の長期キャンプだったものを3回に分けて、より長期的にフォローすることで、「ココロ」の面においても、「カラダ」の面においても、**意欲および取り組みの継続**に効果が見られた。

2つの対象課題

「ココロ」と「カラダ」の**両面**に課題を抱える参加者も多い。また、他者との関わりが活動へのモチベーションになったり、活動する中で他者との関わりが深くなったりと、それぞれのアプローチにより**相乗効果**を得られる場面が見受けられた。

家庭・外部機関との連携

「豊かな心の育成」と「生活習慣の改善」には**家庭でのサポート**が不可欠である。また、**専門的な知識や技能**をもった外部機関と連携し、プログラムを展開することで、より課題の解決にせまることができる。

課題解決に向けた成果を更に高めるために

意欲の継続

オンライン接続ツールなどを活用し、キャンプとキャンプの間やキャンプ後も**仲間とのつながり**を継続していき、キャンプで見直した**生活習慣や日常の楽しさを共有**できるような工夫をしていく。

より仲間との交流を意識したプログラムの実施

振り返りの時間に互いに認め合う時間をつくったり、プログラムに余裕をもたせ、自由に遊ぶ時間をつくったりすることで、**友情の深まり**を実感できるような工夫をしていく。

関係機関との連携

専門的な知識や技能を積極的に活用できる**密な連携や情報交換の機会**の確保していく。

5 実行委員から

平成23年度より始まった花山名物「カラダにeキャンプ」に、令和3年度から「ココロ」が加わり、生活習慣に課題をもつ子どもと家族の意識変容（気づき）がこれまで以上に得られるようになりました。また、ダンスやハイキング、野外炊事などのプログラムをやり遂げることで、子どもたちが達成感・満足感・自己肯定感を得ている様子が感じられました。私が担当している「生活習慣と食事のとり方」の講義についても、後日子どもたちから驚くほどしっかりした感想文をいただき、保護者とともにそれまでの生活習慣を見直すきっかけになってくれたことをとても嬉しく思います。子どもの生活習慣を正しくするには保護者への教育・啓蒙が不可欠ですので、今後は家族も一緒に参加できるプログラムが増えることを期待します。また、初回のキャンプで見直された生活習慣を次のキャンプまで、さらにはキャンプ終了後も維持するための工夫がされると、もっとe!ですね。

宮城県立こども病院 副院長 虻川 大樹 氏

令和4年度は生活習慣の改善に加え、豊かな心の育成もねらいとした「ココロとカラダにeキャンプ」を実施しました。

花山青少年自然の家と松島自然の家の強みである、①「専門的な活動施設」、②「豊富なプログラム活動」、③「教員経験がある企画指導専門職又は社会教育主事によるきめ細やかな支援」、そして、大学生ボランティアによるサポートにより、参加した児童生徒は生活改善のきっかけづくりや人との関わりをとおして自尊感情を高めることができたと思います。

合計3回、8日間のリアルな自然体験活動は、児童生徒が生活していく過程での「学びの基礎」となることでしょう。

次年度も各関係団体等と連携を深めながら実施できればと思いますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

宮城県教育庁生涯学習課社会教育推進班 課長補佐 色川 洋二 氏

本キャンプの名前に「ココロ」が加わって「ココロとカラダにeキャンプ」になりました。本キャンプには、参加者にとって大切な「カラダ」の成長と「ココロ」の成長を促すためのプログラムがたくさん盛り込まれています。3回に分けて開催されたキャンプは、回を重ねるごとに参加者達の「ココロ」に大きな変化をもたらしているように思います。第1回は「仲間との出会い」であり緊張しながらも友達になることの喜びを感じたのではないのでしょうか。第2回は仲間の存在が「あきらめずに最後までやる」原動力となり、助け合うということの大切さを知ることが出来たように思います。そして、最後の第3回では協力する体験の積み重ねから「友情の深まり」を実感することが出来るようになっていったように思います。キャンプでのいろいろな人との出会いと、失敗も含めた成功体験の積み重ねが、これからの成長に大きな力になってくれるのではないかと感じております。

東北大学大学院医学系研究科 准教授 大塚 達以 氏

今回のeキャンプには元々、身体を動かすことが好きな子どもたちが74%もいました。キャンプを通して、その割合がさらに増えていたことはキャンプの魅力なのだと思います。参加した子どもの1人は、キャンプ前には身体を動かすことが嫌いと回答していましたが、運動への趣向が好転していました。20名程度の参加者のうち1名のみですが、そもそも身体を動かすことに好意的ではない子どもが身体を動かすキャンプに参加し続けたことに本企画の魅力を感じます。一方、課題も見られたような気がします。それはキャンプ以外の場面で実際に身体を動かす行動変容です。日常生活で子どもが運動を実践に移せるよう、彼らの自己効力感を高める取り組みを強化すべきかもしれません。コロナ禍の影響でZoom、Googleミーティングなど新しいツールも浸透してきました。例えば、遠隔ツールを活用しキャンプ期間終了後にもキャンプで経験した楽しさを共有できる取り組みが今後の課題と言えるのかもしれません。

東北学院大学教養学部人間科学科 准教授 岡崎 勘造 氏

ココロとカラダにeキャンプ

— 令和4年度担当職員 —

企画指導専門職 鎌田 浩徳
郡司 佳代子

事業推進係 高橋 諒
高城 清子

— 令和2・3年度担当職員 —

主任企画指導専門職 黒田 守道

事業推進係 高橋 春菜
三浦 一志

— 後援 —

宮城県教育委員会
栗原市教育委員会

— 協力 —

宮城県立こども病院
東北大学
東北学院大学
宮城県教育庁生涯学習課
株式会社ベガルタ仙台
7color dance studio

令和4年度 花山青少年自然の家職員

所長…妹尾 剛
次長…山田 健一

主任企画指導専門職…村山 浩康
企画指導専門職……鎌田 浩徳
菊池 恵理
郡司 佳代子

事業推進係長……田口 康宏
事業推進係……高橋 諒
星野 雄哉
馬場 裕子
高城 清子
三浦 一志
石田 一輝
狩野 邦昭

総務係長……小野寺 洋幸
総務係……森田 博子

管理係長……川上 智和
管理係……土生 建一郎
中條 修子



令和5年度も
「ココロとカラダに
eキャンプ」を
開催予定です！



令和5年3月発行

お問い合わせ／独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家

〒987-2593 宮城県栗原市花山字本沢沼山61-1
TEL 0228-56-2311 FAX 0228-56-2469
URL <https://hanayama.niye.go.jp/> MAIL hanayama@niye.go.jp